



京都社会人大学校

北近畿校通信

第64号 2025年 9月

北近畿校運営委員会

事務局発行

☎080-2511-1751

今年度の講座も折り返し 後半も充実した講座に!

異常な暑さの7・8月でした。9月10月も「気温は平年より高い」予報ですね。コロナもまた流行っているとか。後半も元気に受講できるよう体調に気を付けましょう。

写真講座 会場変更のお知らせ

10月21日の会場は

吹風舎→福知山市厚生会館

2階第2会議室

に変更します。



7月のひとこと感想より

Q 時事問題講座「今日はロシアとウクライナと思ってきた。よく変更があるが、知らせてもらう方法はないだろうか。」

A 日程や会場などの変更は、分かった時点でこの通信に掲載するようにしています。今回は62号(6月の講座でお配りしたもの)に、7月

と12月の講座の入れ替えを掲載しました。直前6月の講座を欠席されお手元に届かなかったかと推察します。申し訳ありませんでした。

通信は毎号、「京都高齢者大学校」のHPから「北近畿校トップ」をクリックして読むことができますので、講座を休まれた方はお手数ですがチェックくださると助かります。

7月の各講座の概要と、ひとこと感想から

(感想は一部を抜粋したものとあります。ご了承ください)

◆時事問題講座 7月8日

「中国の『戦狼外交』と台湾問題」 講師:山本恒人氏

先月に続き、多くの方に大変興味のあるテーマでした。講師から「受講生の皆さん、非常に熱心ですね」と評されるほど講義に聞き入っておられました。

ウクライナとロシア、イスラエルとイラン、インドとパキスタン等、世界各地で軍事衝突が起きています。いかなる理由にせよ、戦争は人の命・財産を奪い、プラスになる事は一つ生じません。

速やかに独立、統一志向、でもなく、台湾民衆の86.3%は基本的に現状維持、と圧倒的に多いことでもわかるように、民意は戦争を避け悲しい思いをしたくないのではないのでしょうか。次世代、次々世代のより良い解決策まで結論を先延ばしするのも解決策の一つであるようにも思われます。



台湾には関心がありましたが、「台湾有事」の意味を取り違えていたことを理解しました。もう一点、なんと無しに台湾には親しみを抱いていましたが、その歴史的背景が日本の侵略にあったのかと知ると複雑です。恥ずかしいです。

台湾国内の情勢、中国、米国との関係、1920年ごろからの変遷など、あいまいな知識であったことを整理できてよかったです。台湾市民のバランス感覚が(日本のような無関心層は多くないのでしょうか)現状維持で争いを避けているのはすごい。

台湾有事とは中国が一方的に台湾を自国の物とするために武力行動を起こすことのように思われている人々が多いように思う。自分もそうでした。でもアメリカが台湾の民意を無視して自国のために日本を丸め込んで中国つぶしにかかっていることを理解しました。



◆寄席芸鑑賞講座 7月10日

「浪曲を学び楽しむ」

講師：真山隼人氏、沢村さくら氏

真山さんの浪曲も良かったです。熱演でした。感心したのは、曲師の三味線です。アドリブで、様々な音を巧みに弾かれるのは、聞き惚れてしまいます。

この頃、浪曲を余り聞く機会が無かったので、ストーリーのある物語を浪曲のデフォルメの付いた話、面白さに感動した。三味線が物語を盛り上げ、調子が、なるほどと思えた。三味線の技術に感動した。

浪曲は初めての聴講でした。面白かったです。幼少期(はるか昔)、母や祖母がラジオから流れて来る浪曲に、夢中になってたのを思い出して懐かしい気がした。浪曲の面白みが分かりました。

浪曲は初めての聴講でした。面白かったです。

漫画が浪曲になるなんて目からうろこ、素晴らしい！昨年の「落語を浪曲に」で、びっくりしていたのに更に驚きです。

落語、講談、浪曲は、3大話芸と言われ、浪曲は、三味線(曲師さん)の音色に合わせて演じられるもの。物語は、節と啖呵(たんか)で出来ている。昔は、座布団の上に座って演じられていた様ですが、明治の中頃から、武士道を解く演説スタイルの(立って演じる)演芸に。

昭和の中頃には3千人いた浪曲師も、今では東西合わせても100名にも満たない。大阪では15人。曲師(三味線奏者)は、たったの3人。浪曲は、伝承芸ではなく、師匠の真似をすることはできなくて、オリジナルを作りあげる物。伴奏にも、節にも楽譜はなく全てアドリブ。基本は、喋っている言葉に音を乗せるもの。三味線の演奏には、基本の地節、きざみ、うれい、浮かれ等があり、話の内容によってその都度使い分ける。また、曲師の掛け声も、浪曲の後押しとなっている。曲師あつての浪曲。ということで、昭和11年に浪曲コンクールで1位となった「人生競馬」を演じて貰いました。目の前に馬が走っている様でした。

後半では、何と！漫画「じゃりん子チエ」が浪曲に！！大阪では「じゃりん子チエ」人気は根強くて会場は満員に。その演目を今回演じて頂きました。漫画までが浪曲になるんだと、その発想にも皆さん驚いておられました。チエちゃんの、けなげさと愛おしさを感じられる演目でした。



◆写真講座 7月15日

「前期の振り返り/夏休みの課題」 講師：四方智基氏

5月の「五月晴れの福知山城」6月の「スピード感あふれるドッグラン」で受講生の撮影した写真をゆっくりみんなで見ながら、ピント合わせや余白の撮り方など、先生から講評もいただきました。また、出された夏休みの課題は「花火」。設定や撮影ポイントなど教えていただきましたが、みなさん、どんな写真が撮れているのでしょうか。

9月の室内撮影の講座に向けて、いろんな照明器具を使った撮影の練習も。



5月6月の振り返りでみなさんの作品を見ることは勉強になりました。自分でシャッター速度や絞りを設定して撮影できるようになりたいです。

講評は課題もよくわかり良かったです。

夏休みの課題が花火ということで、今まで使ったことのない設定をたくさん教えてもらいました。うまく撮れたらいいのですが、大変そうです。



◆歴史講座 7月16日

「アイヌ民族の歴史と単一民族主義批判」

講師：石川康宏氏

漠然と知っているようで、本当はよくわかっていないアイヌ民族について、基礎から教えてもらいました。講義はそもそも「民族」とは何かと言う話から始まりました。アイヌ民族、琉球民族、大和民族、日本民族など、民族が付く様々な表現があり、あいまいなまま使われる場合もあります。現在は同族意識・アイデンティティ重視で民族をとらえようとする傾向にあるようです。

講義の中心はアイヌの人たちが長く差別されてきた具体的な事実の解説。明治時代に同化政策として制定された「北海道旧土人保護法」。その後「アイヌ文化振興法」、「アイヌ新法」と法律は整備されてきましたが、いまだ国連の「権利宣言」の内容が満たされていないなど問題も多いと。

具体的な事例として、祭祀のためのサケ捕獲が認められていないこと、研究のためとしてアイヌの墓から持ち出された遺骨の返還問題の説明がありました。

アイヌ民族について、誰もが共通の理解に至るには、まだ時間が必要なのではないでしょうか。



大変ていねいな説明をいただきよく理解できたように思います。「アイヌ新法」の持つ問題点や課題も良く判り、自身の課題として。これからもしっかりと学習し、正しく理解をすすめるかならなければならないと感じた。

社会が力の論理の支配を受けている中で、多数者が少数者を尊重できなくなる悲しい歴史に思いが至る講座でした。力の論理、戦争の論理からの解放をこそ。

世界中に先住民がいるけれども、西部劇でアメリカの先住民の人々が“インディアン”としてよく出てきた。また、オーストラリアではアボリジニの人たちが“保護”されているとよく聞かされた。現在どうなっているのか。トランプ大統領の言動を見ていると“移民”とかで迫害に近い。社会が逆行しているように感じるこの頃だ。

創業者の従業員を思う気持ちに感銘を受けました。親切ていねいな案内をありがとうございました。



楽しい1日でした。古い機械に感動しました。



近くにこんなすばらしい企業があったとはビックリです。ぜひ日本のみなさんにも知ってほしいですね。ドラマ化、とっても期待しています。

◆北近畿探訪講座 7月23日

「グンゼ創業者 波多野鶴吉と丹波地域の蚕糸業」

講師：グンゼ博物苑職員 天橋歩氏

最初に創業者の波多野鶴吉のことを説明していただきました。良いところもダメな面も話され、ダメな面はカットするのが普通の企業だと思いますが、ここではそうではありませんでした。聞く側にとっては、人生のありようを教えられているように感じました。また三丹地方（但馬、丹後、丹波）の蚕は全国でも劣悪であったので、これを改良しようと立ち上がったのが動機の一つだったことも知りました。丹後ちりめんが有名なので、粗悪品製造地帯であったことは想像が及びもしなくて勉強になりました。

説明の後には展示館を見学させてもらい、グンゼの歴史を見て回りました。衣料の技術を生かした医療事業を展開されていることや、靴下の製造機械は戦前のアメリカ製のものですが、製造過程で出てしまう綿クズを今なら簡単にセンサーでチェックし処理できることが、当時では機械的に精密にやっていたことなどを知り、感銘を受けました。参加者の方が「最初に見た時、こんな機械を作っている国と戦争をして勝てる訳がないと思った」と言っておられましたが、全くその通りだと思いました。

◆漢字学講座 7月24日
「音読みと訓読み」 講師:久保裕之氏

今日は、ドイツから夏休みを利用して若いご夫婦(妻は日本人)が講義を受けにられました。夫さんは、日本語が堪能で白川静先生を尊敬されています。このお二人の参加で、教室がいつもとは違う雰囲気になりました。

とてもよかった。日本人、日本語を使いこなしている自分、誇りを持った。日本語で大学で学ぶことができました。現在、高校でナイジェリアのサッカー選手に日本語指導していますが、学校で英語で授業を受けているので英語を使ったりして教えることができます。

- ・音：漢字の入ってきた当時の中国語の発音を日本人が真似たもの
訓：日本語として存在していた語を漢字の読みとしてもあてはめたもの
漢字が来る！

山は中国では「サン」、日本では「やま」という。そう日本ではサンともやまとも呼べばいい。これを中国から帰ってきた留学生と日本の朝廷との会話というドラマ仕立てで講義されました。



- ・呉音(一番古い) 4~6世紀ごろ・・・呉から朝鮮の百済に伝わり日本に入ってきた
奈良時代に遣隋使や留学僧が長安から漢音を学び持ち帰る以前にすでに日本に定着していた漢字音
漢音 7~9世紀ごろ
7・8世紀、奈良時代後期から平安時代の初めごろまでに、遣隋使・遣唐使や留学僧などにより伝えられた音
唐音 10世紀ごろ
鎌倉時代以降に中国から入ってきた字音
- ・音読みがたくさんあるのはなぜ？
中国の漢字の読み方が時代によって変わった。
例えば明は、呉音では(ミョウ) 漢音では(メイ) 唐音では(ミン)となる。
- ・音読みがたくさんある理由
①中国語がなまってはいった。そうは聞こえなかった。またはそう聞こえても表記の仕様がなく、別の表記とした。
②長い年月の間に中国での音が変化した。
③方言音が入った。・・・例) 餃子は方言
- ・送り仮名
漢字は中国語を表すために作られた文字
日本語を書き表すために、漢字だけでは伝わらない文字を付け足したもの
高さ(たかさ) 高まり(たかまり) 高める(たかめる)
- ・熟字訓
日本語の一つの言葉(訓)を2字より多い漢字で表す言葉
今日(コンニチ) = 今(コン) + 日(ニチ)
- ・当て字
漢字の音(読み方)を意味とは関係なく使って表した言葉
出鱈目(でたらめ) 珍紛漢紛(ちんぷんかんぷん)
- ・中国は、時代により読み方を変えたが、日本はほとんどを受け入れた。これだけ複雑な日本語を話せるのは私たちが幼いころより慣れ親しんでいるからである。

なぜ、外郎(ウイロウ)が「外」この字になったのか今まで不思議でしたが納得できました。面白いです。

難しかったですが体系立てて音と訓のお話をさせていただいてそうなんだとただただ感心しました。

慣用音の問題のところがよく理解できなかった。あとは楽しく勉強できました。

とても楽しかった。昔の日本人は広い視野とアイデアで多くを受け入れ、使いこなしていたことに感動しました。でも、読み方を外国人の方に教えるのは大変!!

日本語は外国の方から見ると複雑で分かりにくいといわれるということですが、日本の人と外国との豊かな交流の中で、日本語が熟成されすべてをしっかりと取り込んで、というスタイルは日本人々の特徴なんだと感じました。講座を通じて漢字の色々な謎が解けていくのがとても面白く感じました。